

「ヨーお伶俐、お伶俐」

と、氣に入つたぞよと許り己れは我が子を賞めた。

「父ちゃんお土産買って来て頂戴ね」

「ハイ、ハイ買って来ますよ」

と云ひながら外へ出た。外へ出たかと思ふと又慌てゝ入つて来た。

「なアに？」

「ステツキを持って行くよ」

「まア様子振つて見たがりだわねえ」

と、冷評かしながら、妻は奥へ入つて行つて出して来た。己れは其れを受取つて二三度軽やかに空を振つて見た。

「よしッ」

と得意氣に叫んで再び外へ出た。

汽車の時間も、家を出た時間も全然無頓着とは餘り呑氣過ぎると思ふて、途中の本屋へ旅行案内を買ひに入つた。

「お出かけですか」

と、何日もニコ／＼と愛憎のいゝ主人は訊ねた。

「まゝ箱根へ行こかと思ひまして」

「箱根へ？ 結構ですね、いゝ天氣ですから御愉快でせう？」

「餘り上天氣ですから、ツイ浮々と………其れぢや之を戴いて行きませす」

と、旅行案内を一冊買ひ、道々一體何時頃の汽車があるだらうと歩き歩き頁を繰つた。

「待てよ、此處だ、此處だ。エーと國府津行、品川發午後一時九分か」
時計を出して見ると、十二時十分だ。

「なアに大丈夫だ、品川まで新大久保から卅分又は四十分と見ても未だ時間の餘裕が少しある。之がもう廿分ぼんやりしてゐたら、此の汽車は通すんだつたに、何が仕合になるものか分らないものだ」と呟やきながら、小西酒屋の前まで來ると、遙か停留場から電車がポーウと出た。

「ヤッ失策つた。十五分待たなくちやならぬ、同じ待つなら一寸電話でも掛けてやれ」

と、己れは岡崎さんへ電話をかけて昨日行く筈だつたけど、急に今出立ことにしたと半分羨しがらせを云ひ残して置かうとツカ〜と酒店へ入つて、電話機を二三度廻はしたが、何番々々と受けた限り、いくら此

方が番號を判然云つても少つとも取次いで呉れぬので、仕舞ひには業を煮やして、「エツ止めて了へ」と捨鉢に云ひながら、掛け得られなかつた不愉快さを顔に漲らして出て了つた。

今度は少し早足に歩いた、若しや次の電車を通したら大變だと云ふ氣持ちが知らず識らず湧き立つて來たからだ。電話をかけてゐた時間が何分過ぎたか、それが不明であつた丈に焦慮が強かつた。

然し停留場へ來て、待合室に各客人が穩かに、そして暢かな顔を晒してゐるのを見た時、己れは急に落着を見せた。そして菅原道真みたいな悠然たる態度で切符を買つた。

間もなく電車が來た。乗つた。

己れの釣革にブラ下がつてゐた眼の前に、子供が窓から首を出してゐる

のを身體を斜めにして守つてゐる美しい女があつた、眼と鼻がいゝなど己れは思ふた、己れの妻より綺麗だ、亭主以つて瞑す可しと今度は横にゐた亭主を見た。亭主は瞑すどころか眼をキョロ／＼させてゐた、二人は時々仲よさ相に話を交はした、己れは横を向いて了つた。

品川で下り、新聞を買つて待つこと暫し、列車が來た。最初一列車の中へ入つたが、その列車の中の人種は至る所万緑叢ばかりのむくつけき男の顔揃ひで、少つとも紅一點と云ふ柔味が無かつたので、興ざめて、直ぐ列車を選んだ。

代へた列車の中にも矢張り紅一點は見出せなかつたけれど、思ひ切り空いてゐたのに鬱憤稍晴れて、中央へと陣取つた。

フと見廻はすと、二間ばかり放れた所に東髪に結ふた十八九の娘がゐ

た。更に眼を轉ずると、二人の青年が並んでゐた。己れは其の青年の眼が揃ひも揃ふて一方に働いてゐるのに氣が附いて、其の視線の投場を注意すると、其れは其の娘に灑がれてゐるのであつた。更に注意して見ると其の娘は一人だつた。己れは彼奴等め、胸躍らしてゐるナと鼻でフ、ンと嘲笑つた。

退屈で仕方がない、え、ツまゝよ此處に動く中で原稿が書けるか書けぬか知らぬが、兎に角書けたら書いて見ろだと、用紙をポケットから出した。同時に一昨日買った万年筆も取り出した。そして暇潰しだからと、ゆられ／＼ながらも書き出して見た、字と云ふ字は悉くダンスを始めた。

想も落着か無かつた。けれども己れは止めなかつた。

藤澤驛で江の島行は乗換へと大きな車掌の聲にフと顔を擡げると、娘は

之伸さ



下りて行つた、續いて青年も立つた、己れは何故だかニガリと微笑を含んだ。その後から更に横濱から乗つた四五人の外國人も續いた。江の島！ 何んだか一寸下りて見たい様な氣がする。

然し列車は直ぐ動いた。

(以上湯ヶ原天野屋旅館にて着いた晩)

名は忘れたが、國府津から一つ手前の驛で、己れはペンをとめた。あと七分で國府津だと思ふたからであらう。始めて煙草を出して心ゆくばかり吸ふた。

フと箱根なら既に二度三度行つてるから詰らないと急に思ひ込んだ。箱根の山、箱根の水、それはもう鮮かに頭腦にある。餘りに判然過ぎる

今そこへ行くのだ、何等の奇、何等の趣が改めて無い様な気が仕出した。

箱根は止して湯ヶ原へ行つて見よかなと此の時思ふた。

何日だったか隣の鈴木君が湯ヶ原へ行つた時のことを話したことがある。君も彼處は勿論行つたことがあるだらうと訊いたから、いゝやと頭搔いたら、ホー之りや意外だ、まだ知らないのか、君に似せんなアーと本當に驚いてゐた。そして其の時の失敗談を話して聴かせた。何でも國府津驛で下りて、片手をあけて自動車を呼び、ヒラリと飛び乗つて、湯ヶ原へと軽く發音した所は天つ晴れ一代の才人であつたが、さて湯ヶ原へ着いて「オイいくらだ」と顎でシヤクつて、自動車代を拂はふとしたら、その自動車代が眼の玉が飛び出る程たかくアレーと總つかり財布を

叩いたお蔭で宿に泊るにも泊られず途方に暮れたことから、仕方なしに肝腎の病氣見舞に行つた其の病人に泣きついて「どうか宜しく」と頭搔きさく白狀したことを、彼は又頭搔きさく己れに話し「君も大に用心しなくちや不可んよ」に前車の覆へつた自分の實際をマザクと己れに説いた、だから湯ヶ原と聴くと先づ己れには其の自動車が思ひ出された。弟、湊も嘗て湯ヶ原へ来たことがある。そして僕に「君みたいな原稿を書く者は湯ヶ原へ行つて見たまへ、あんな静かな所でありやしないよ、別に見る所は無いが、實に静かだ」と口を極めて云つてゐた。静かな所！それも今想ひ出された、況んや既に己れは箱根を知り、修善寺を知り、然して遙か伊東温泉まで行つた者が、近くの湯ヶ原へ行つたことが無いとは何んだか自分の手落ちらしく思はれ出した。行くなら

まだ行かない所へ行け！ さうだ、湯河原へ行かう。
 國府津へ汽車が着いた時、己れの腹はもう湯河原と確かに定めて了つた。

(以上朝倉前)

□

國府津驛を下りた。湯河原まで自動車をと呶鳴つたが最後眼玉のハジキ出る程暴利れるぞと云ふ鈴木君の忠告有難くも身に浸みて、人間萬事慚巧が肝心と、電車を目掛けて、座席に早く有り附かなくちやと杖抱へて一目散、後からゾロ／＼と限りなく他人が入り込んで来たが、遅れたものは矢つ張り東京の様に釣帯にブラ下つてゐた。己れは少つとも可哀想だと思はなかつた。寧ろ何んだか一種痛快の轟きを覺えた。斯くて電車は走つた。

己は無聊の餘りにポケットから旅行案内を出して、小田原發の輕便鐵道の時間を見た、三時廿分、五時廿分とある。國府津へ着いたのが三時だ、電車が出たのが三時七分だ、若し三時廿分の列車に間に合ふ様に此の電車が走つて呉れるものとしたら、十三分間に小田原へ着いて呉れなくちやならぬ。それは兎ても覺束な相だ。して見れば列車は五時二十分だ、それぢや遅そ過ぎる。湯河原へ着くのは六時になる、情けなや夜の帳が下ろされて了ふ。
 困つたこつた、之れと知つたら何故己れは國府津驛を下りるや否や小田原まで自動車を飛ばさなかつたんだらう、自動車で小田原までなら、一氣に間に合つたものを。それに從來の經驗に徴して見ても小田原までなら、その賃錢も大概は見當が附く。知れたものだ。惜しいことをした。

氣短かな己れが何うして二時間近い時間をボカンとステーションの待合室に口をあけて居られるものか、之りや何うかしくなくちやなるまいて。などと思ひつゝも何うすることも出来なかつた、幾度かムヅ／＼して見たが其れは唯仕方のない焦慮に過ぎなかつた。

一體小田原から湯河原まで二時間も経過るとは何んと云ふ長い時間だらう、それが癪だと今度は方向を變へて己れは腹立てた、こんな積りで無かつたんだ、それぢや何麼積りだつた？ と訊かれると何麼積りでも無かつた、兎に角二時間が氣に入らぬ。己れは獨りでヤキモキした。

幾つかの村を過ぎ幾度か電車が停つた後漸つと小田原の町へ入つた、町へ入つてからも輕便前まで可成にあつた。己れは口から酢の出る程隣人に「まだですか、まだですか」と訊いた、隣人も終ひには五月蠅がつた、

己れは遂に車掌に鋒を向けた。車掌はついた時お知らせしますと云つて心安がる可しと云ふ風情を示したので、漸つとホツとして、それぢやと始めて暢やかに眼を閉ぶる。

「貴方、此處ですよ輕便前は」

云はれて、己れはハツとして下りた、下りるや直ぐ時間を見た、三時四十分だ。勿論三時廿分の列車にはだから間に合はなかつた、勢ひ次の發車まで恰んど二時間近い時間は矢つ張り此處で待たなくちやならなかつた。己れはデロリ／＼と待合室を見た。汚ない／＼、實に汚ない、之でも待合室かと腹の中で呟鳴つた。

フと眼に附いたのが、椅子の並んだ待合所である、上を見るとさかい屋と書いてある。よし彼處へ入つてやれとツカ／＼進んだ。

「おらつしやい」

「おらつしやいまし」

と、おかみさんと女中との二人が出て来た、一隅を物色して其處へ腰を下ろす。

茶と菓子が出た。

「何か召上りますか」

「何がある？」

「おすしに親子井なら」

「おすし？ 親子井？」

と、己れは思はず額に皺を寄せた、どつちも嫌ひだつたからだ。

「さア」

と、何うしようかなと思ふた。飯は今朝家を出る時喰つた限り。然しさまでに空腹も覚えぬ。けれども今から此處に大分待つて、又汽車に二時間ゆられ行く途中屹度腹は空るだらう、己れは飯を喰はずに一日ゐることは平氣だけど、その代り恐ろしく神経衰弱になる癖がある、空腹の間世の中の何んでもが悲しくなる、それが厭だ。おまけに空腹の上へ列車に揺られたりすると、耳がポーツと鳴る、頭がぼんやりする。之れ又經驗上既知の事實だ。

だから何か此處で詰め込んで置く必要が是非ある。おすしと親子井と較べては親子井の方がいい。己れは「ぢや親子」と云つた。女中はハイと答へた。此の家で出来るんだらうと思ふてたら外へ出て行つた。外から取り寄せるらしい、どつちでもいい。

又暇潰しと許り原稿用紙とペンとを取出した。所へ女中が戻つて來た。

「今から御飯を焚くので、遅くなる相ですから、何か外に……」

「焚いたらいゝぢやないか」

と、己れはブンとした。

「お待ちになりますか」

「なります」

と今度は笑つて答へた、待つ筈だ、時間は充分有り餘つてゐるぢやないか。

「では」

と、重ねて出て行つた。己れはペンを握つた、そして一氣に夢中になつて書き續けた、時々疲れた眼を擡げると、彼女等も一樣に變な顔して己

れの顔を見た。その裡親子井が運ばれた、喰つた、喰ひ終るや又ペンを持つた。

大きな犬がノソリと己れの腋の下から首を出した、己れは突然でギョツとしたが、危害を加へられるんぢやないと悟ると同時に、べんちやらの爲めにビスケットの一片を投げて、之であつち行つて呉れとした。喰ひ終つた犬は再び甘い汁を此の客から得ようとしたが、己れは知らん顔して紙に向つてゐた。いつしか去つて了つた。

先刻此の家へ入つて座るや直ぐおかみさんが汽車の切符は買つて置いてあげませうと云つたので、己れは金を渡す時、傳へ聞く所に依ると、この汽車は汽罐に近い列車にドン／＼煙が入ると云ふから、二等でも三等でも構はぬ汽罐に遠い列車の方を買つて呉れと依頼した。何んでも此の

列車は時に依ると三等の方がだから却つて幸福だと聽いてゐたからだ。聽て最早發車時刻も餘す所十分になつたから、己れはソロ／＼ペンを仕舞ひかけてると、番頭が慌たどしく入つて来ておかみさんにペコ／＼頭搔きながら、

「すつかり假寢して、ツイ二等より買へませんでした」と、口籠つた。

「二等だと云ふと？」

と、おかみさんの眼は光つた。

「ハイ汽鐘に近い方で」

「何をぼんやりしてゐるんだね、うか／＼してゐちや」

と、おかみさんは態々客の手前無理に聲を荒らげて見せて叱り付けなが

ら、今度は姿態を作つて己れに近寄りながら、

「御免なさいまし、番頭がツイ／＼何んでしたものですから、二等を買つて了つて」

「さう」

と、云つた限り、己れは苦笑を見せた儘、切符を受取つた。

「本當に仕方がないね」と、又もやおかみさんは申譯的に番頭を叱つた。番頭の片手はへい／＼と頭へ上がった。

外へ出るともう待合室の開札口はギツシリだ。その時己れは所謂輕便列車と云ふものを見た。

まア何んて汚ない小さい汽車だらう、之が一體汽車と云ふ名稱を附けられる丈の資格があるんだらうか、全で箱だ、否全で安永年間に出來た

様な汽車だ。これでも汽車かいと己れは又苦笑した。その裡ドヤ／＼と客は開札口を押した、もう切符を切り始めたナと思ふ頃、己れは最後の一番しんがりだつた。駄目だ。うか／＼すると坐れないかも知れぬぞと途方に暮れた顔してゐると、此の時さかい屋の番頭がひよいと側の圍を明けて呉れて、

「旦那。此方から」

と、素早く峻かした。締めたツと己れは一散に身を躍らした、番頭は切符を受取りながら「あとでお渡しします」と云つたから己れは其の儘どつちが二等か三等か氣が附かなかつたけれど、汚ない風情の乗らぬ方の列車へこぢ入つた、矢つ張り其れが二等だつた。坐つて見ると、二等も三等も坐席に少つとも變りが無かつた。布一枚が

境界だ、あとで聽くと、三等は時として坐席へ坐れないことがあるが、二等は坐れる丈けしか切符を賣らぬから、どつち道坐れる、二等と三等の違ひは其れ丈だと云ふことだ。己れは中央の位置を占めてフンゾリ返つて居ると、其處へ夫婦連れに子供の三人が入つて來た。誰か三等の客が猫婆定め込んで、此の二等室にゐるものと見えて、坐席は満員だつた。子供が可哀想だと思ふたので、己れは無理に身體を小さくして座席を少し儲へて子供の爲めに明けて遣つた、然るに其の親父め有難う一つ云はぬ、當然だと云ふ顔付した、其變事なら明けて遣らなきや好かつたと思ふた。己れは東京で静子を連れて電車に乗つて他人が立つて呉れたり明けて呉れたりすると、「どうも濟みません、濟みませんでした」と三度も四度も首を下げて、有難や貴方

は神や佛やと待遇う。却つて先方が終ひには恐縮する程だ。それ丈
 の心得が無くちや駄目ぢやないか、アーン。
 其の夫婦者は小さく囁いた。

「どれ丈け遣りませうか、之れ丈け？」

と、女房は小さい紙幣を密つと亭主に見せた。

「ウンそれでいゝ」

と亭主は頷いた。

直覺的に己れはサテは番頭に遣るんだなと思ふた、さうだうつかりして
 ゐた己れも其れ丈けの血の廻りが無くちやと思ふたから、素早く財布か
 ら一枚出して、折柄そこへ「ヘイ切符を」と云つて顔出した番頭にフィ
 と掴ませた。番頭は何故か意外なと云ふ表情をした、然して後にハツと

首を下げた。己れは懸て其の夫婦者も渡すだらうと其れとなく様子を見
 てゐたが、素知らぬ顔して嘯いてゐた、屹度俄かに惜しくなつたんだら
 う、して見りや己れも控へてゐりや好かつた、實に飛んでも無い傍杖を
 喰つたものだ。

二等の客の中には立つてゐたものが二三人あつた、それと氣が附いた車
 掌は、

「三等の方が乗つてゐらつしやいませんか」

と、窓の外から列車を見渡して云つた、誰も知らぬ顔してゐた、

「乗つてゐらつしやる筈ですが」

と、今度は之れ丈け云つても未だ立たなかつたら切符も改めまじき權幕
 で云つた、側にゐた番頭はコソ／＼と車掌に何か耳打ち、そつと或る人

人を指示した。

「おませんか」

と、車掌は今しがた指示された客共の顔を「貴様胡散だぞ」と許り見詰めた。すると仕方なしに二人立ち上がった。見ると成程二等と洒落込む丈の顔付ぢやない、ブツ／＼口の中で何やら云ひながら三等の方へ去つて行つた。それを見終つた車掌は「さアー、いゝぞ」と相圖した、と同時に眞黒な汚ない塵埃りの煙がトツ／＼煙突から出た、煙突と云つても此の煙突は摺鉢みたいな變な形をしてゐた。

煙はパツと一時に室を襲ふた、その臭さ!! その汚なさ!! 人々は期せずして眼を閉ぢ、口を蓋ふた。さて又その汽車の鈍いつたらない、全で東京の電車みたいな速力だ。電車と云へば何故之を電車にしないのかと

思はれる。もう何んとも形容の出来ない列車だ、イヤ箱だ、己れは文明の東京近くに此麼列車あるとは知らなかつたと唯々意外に感じた。客と云ふ者は殆んど煙突の中へ首を突き込んで居ると同然だ。突然海が見え出した、オヤ鷗か? と思ふたらそれは白い小波であつた、海の色は矢つ張り美しかつた。走る程に岩に打つ波の面白さ、然しそれも直ぐ眼の中へ入る煙で興醒めること夥だしい。時ならぬ所で停車したり、アレ山がと思ふと又煙に責められたり、不快此の上なしである、此麼事なら幾程高價くても自動車を選べば宜かつたと泌々後悔を續けた。

軌道は時に海岸に沿ひ、時に山に入り、時には又村落を過ぎた、一つの山を越へると必ずそこに村があつた、オヤ此處にも人が住む、此處にも

と時々珍らしげに首を出して見た。

斯くて困憊の擧句の身體が、日の光り淡き夕方七時頃、目指す湯河原停留場に着いた。ヤレ／＼と帽子の埃を呼息で吹き落しながら、ホツとして下りると、宿も何もない、オヤと思ふると誰やらが温泉場まではまだ一里もありますよと云ふ。何んだ全で狐につまゝれた様だ。己れはキヨロリとしてゐると、

「旦那宿は孰方へ？」と番頭風が此の時進み出て訊いた。

「富士屋？」

と己れは答へた。鈴木君が湯河原では富士屋で泊まつたと云つた言葉が思ひ出されたからだ。

「富士屋の番頭なら僅つた今の今まで此處にゐたんですが」

と惜し相にして

「自動車であらつしやいますか」と訊く。見ると三四人既に早くも陣取つてゐる。それぢやと己れも續いて乗つた。

自動車は五六間進んだかと思ふと、ピタリと待合店前で止めて、運転手は

「モ一人誰方が乗れますよ、乗る方がありませんか」

と、中を覗き／＼呼んだ。己れも何気なしに見た。その時後向きになつてゐる素敵なスタイルの女が眼に付いたので、此方を向いて顔を見せりやいゝがなアと思ふ間もあらせず、運転手の此の聲でフィと女は振り返つた。

「オヤツ」と己れは驚いて叫んだ。女も視線を己れと合はすが早い

「あらッ」と云ふ表情をした。己れはにこりとした、女もにこりとした、女は少しく赤らめた。己れは小手で招いた、女は此方へ来ようとした、時既に一人の客が早くも一つの此の空席を目掛けて了つた。女は失望の笑ひを洩らした、そして其處に坐つてゐる老婦人に何やら囁いた、老婦人の眼はヂーッと己れに灑がれた。女は何か云ひたげな表情を示したが遅かつた。自動車は期定の人員を收容すると共に轟々の爆音を立て、走り出した。

何うしてあの女が彼處にゐたんだらう？　いつ見ても晴れやかなあの顔、あの色、そして又いつ見てもあの美しさ！　己れは今までの疲れが一時に逃げ出して行く様な氣持になつた、同時に俄かに光明が輝き出した様な歡喜に胸躍らせた。

ツイ先達のことである、舊友と云へば舊友、舊友と云ふ程の仲でも無いと云へば無い一人の男から、珍らしくも二年振りで己れに電話をかけて来た。最初は挨拶やら何やらから始まつて、時に君を是非帝國ホテルへ招待したいんだが来てくれるかい？　と訊いた。己れは茲に二三日は御免だと答へて、彼奴柄でもないことを云ひ出して、いゝ加減戯つて見る氣だなど内心フンとした。所が「實は或る大家の令嬢が君に是非紹介して呉れと云ふものだから」と云ふ。大家とは誰れだい？　と己れは反問した、今云はないが何れ分るからと云ふ、大家の令嬢なら日に二三人は必ず會見の申込みがあるよと、却つて逆襲して遣つたら「やア大きく出たなア」ときた。如何にも大きく出たさ。何も大家なんぞと鹿爪らしう並べなくてもいゝのに、威し的に否若し斯う云つたら一二もなく應ず

るだらうと彼は大家を先づ背景とし、續いて美人らしく聽える令嬢と醫
 したんだ。己れも流石に一寸は動いたが、然し他見男さんの重味も見せ
 なくちやと矢つ張り旗幟鮮明に茲二三日はと頑張つた。ちや十五日頃は
 何うだときたから、その時分にならなくちや分らないと、全で大臣みた
 いな口を利いた。ちや何れ又電話をかけるからと切つて、改めて十四日
 彼から電話があつた、その夜は別に約束も無し、それに何處か華かな所
 が無いかなア——と思ふてゐた矢先だつたから、一二もなく應じて行
 つた。

その時逢つた女が今見た娘である。若くて而かも美しき女！己れの胸
 が急に躍動し出したのも無理からぬことだ。先方も意外に驚いたらうが
 然し測らざる知己を見て嬉しいことであつたらう、己れも一人旅を餘儀

なくして出て来て、淋しい夜、淋しい朝を迎へなくちやならぬと覺悟し
 てゐたのに、時ならぬ花だ得も云はれぬ花だ、斯うなると生じつか連れ
 が無かつたのが僥倖だつた。全く誰が何處で幸福にブツかるかも知れぬ
 とは此のこつた。

それにしても同じ泊るなら、彼女の宿に泊りたいものだなア、一體彼女
 は何處を宿にしてゐるんだらう、それ丈けでも聽けば好かつた。何故あ
 の時己れは自動車から飛び下りて了はなかつたんだらう、口悔しいつて
 たらない。

それはさて置き、今まで龜の背中に載つてゐた様な鈍い汽車に揺られて
 ゐた己れは驚く可き速度で痛快極まりなく走る此の自動車が嬉しくて堪
 らなかつた。折柄次第に迫まる暮色は總てを美しく装ふた、坦々たる田

舎の大道、濶然たる天地、それを無二無三と走るのだ、然かも己れの胸には美人が宿つた、宿つた美人は知合だつた、己れはゾク／＼こみ上げた。

フと後へ自動車に更に一臺近づき、氣配がしたので、帽子に手を載せて振り返つて見ると、オヤツ！ 彼女が乗つてゐるんぢや無いか、然かもにこやかに笑んでゐるぢやないか。己れも勿論嬉し紛れに確かに破顔、確かに一笑。

今度は本當に湯河原へ着いた、一旅館の前で下りる客があつたので自動車が停つた時に後の一臺が早くも追ひついた。彼女は飛び下りる様にして駆けて、

「他見男さん、お宿どこ？」

「君はどこ？」

「天野屋」

「ぢや僕も天野屋！」

「嬉しいわ！」

二人は心から笑んだ。

彼女は去つた、自動車が又動いた。

天野屋の前でビタリと止まると、己れはヤオラと下りた、其の時己れよりも早く彼女は既に次の自動車から下りて了つてゐた。そして逸早く奥から出て來た番頭に何やら囁いた。番頭は頷いた、迎へた。

「ハイ、おらつしやい、お疲れさまで、お荷物は？」

「無し」



「左様で御座いますか、どうぞ此方へ」

と、玄關へ案内した。女中が二人三人畏まつて平伏以つて迎へた。

「お疲れさまでせう」

「どうぞ此方へ」

「〇〇の間へ御案内」

口々に云つて、己れの手を執らむ許りにした。己れは譯なく嬉しかつた。導かれた部屋は二階の八疊だつた。

「お召變へ遊ばせ」

と、温質し相な女中が早くも浴衣を持って來て呉れる。それちやと素早く洋服を脱ぐ。

何は兎もあれ一風呂浴びなくちやと下りる。カラリとあけると、先刻の

令嬢が着物を着た儘湯を汲んで足へかけてゐた。

「オヤ」と云ひながら話かけようとする、何れゆつくり後でと艶然。

その時女中が手拭を持つて遣つて來たので、令嬢の入つてゐる隣の湯槽へ目がけた。

何んと云ふ美しい湯だらう、己れは浴衣を脱ぎ／＼嘆美の聲をあげて、凝視めた。眞裸體になつて下りて行き、試みに手を指し入れて見ると、熱からず寒からずと云ふ極上温度。それではと身を入れた。温がザッツと溢れた。誰もゐない、一人ばかりだ、その一人が己れだ。暫らく恍惚としてゐると、川のせかるゝ音が久振りに耳にあとづれて來た。

此の湯、此の音、私は暫く眼を閉つた。

湯から上がつて座敷へ戻り、控つかと兩足を投げ出して柱に靠れ、暢や

かに熱い茶を啜る刹那のよさ!!　これが旅の何よりの感興、何よりの悦

樂、又何よりの喜悅であらねばならぬ。ホンの之だ。僅かだけど之れ

だ、此の氣分が欲しさに、味ひたさに己れは飛び出して來たのだ。

「あの御飯は？」

「戴きます」

戴きますとは我れながらしほらしい。

「では早速？」

「いゝや少し間を置いてから」

「承知致しました」

女中は下がつて行く。

四邊は森としてゐる、寂として何等の音がない。成程弟の云つた通り湯

河原は静かな所だ、之ぢや勉強するには持つて来いの土地だらう。疲れがだん／＼出て来た、然し何んだか無暗に己れは嬉しい。御飯は碌々咽喉へ通らなかつた、いつでも旅の最初は常に斯うである。膳が下がつてから、暫しチーツと己れは夢見る様な心地の中に魂を浸してゐた。

何も思はずに、たゞ恍惚してゐる其の気分、いゝものだなア！。

○
「御免下さいまし」

優しい女の聲が障子の外から聴えた、来たな。

「ハイ」

「明けまして宜しゆ御座いますか」

「どうぞ」

すつと開いた、果して彼女だ。芳子さんだ。

「やア」

「オホッ、御免遊ばせ」

と、静かに通つて、両手をついて叮嚀に御辭儀し、

「何うしてゐらしたの？」

「急に思ひ立つて！」

「吃驚してよ。先刻」

「僕も！」

「だつて突然でしたものねえ」

「奇遇だねえ」

「確かに奇遇だわ」と、にぢり出て、

「お連れがゐらつしやるんだと思ふて、最初言葉をおかけしませんでしたわ、御免なさい」

「いゝや」と打ち消して

「君には連れがゐたね？」

「えゝ」

「あれ誰れ？」

「誰れだか分らなかつて？」

「分らなかつた」

「似てゐなかつて」

「？」

「私の母よ」

「ホウお母さんか、お母アさんと來てゐるの？」

「えゝ」

「いつから」

「随分先きから」

「左様」

と云ひながら

「君、あの時何かお母アさんに云つてゐたね」

「えゝ」

「何を云つてゐたんだい！」

「あの方がお母アさん他見男さんですよつて！」

「そしたら？」

「オヤまあ左様つてチーッと貴方を見てゐたでせう！」

「ウン」

「立派な方ねえと賞めてゐたわ」

「有難いな」と一寸眩しい顔して、

「何うして又あんな所へ来てゐたんだい？」

「實は父が来る筈で、迎へに出たの、何う云ふ都合だか見えなかつたのよ、だから歸りませうと用意をしてゐたら、突然他見男さんだつたわ、あゝ父よりも嬉しかつた！」

己れはニヤ／＼笑つた。

「お母アさん何う云つてゐた？」

「お前の好きな方がお出になつたから、もう歸らうなどゝ云はないだらうて！」

「ホウ？ そしたら君は？」

「え、私なんだか嬉しいわと突然母に獅噛み付いたの、まあ此の娘はとお母アさん吃驚してよ」

「僕お母アさんに逢はふかな」

「え、私も母にそれを勧めたの、そしたら何んだか恥かしいつて、屹度氣極りが悪いんでせう、年老りだから」

「なアに構はないのに。一緒に今來ればよかつたに」

「そりや随分勧めたのよ、でも母はお前一人で行つてゐらつしやいて！」

「若いものに同情のあるお母アさんだなア」と笑ふと、彼女も

「ホッ」と、白い顔を崩して「そりや開化けてゐる母よ」と賞めて、

「他見男さん今から散歩いいや？」

「出てもいい」

「出ませうよ、御飯お済みになつたでせう？」

「ウン」

「ぢや出ませうね、ね、直ぐよ、ね、階下に待つてるわ」

と、一寸髪でも撫であげる積りか先きに下りて行つた。

それではと己れは態と落着いて、ゆつくりして行くと、

「お出かけで御座いますか」

と、女中が飛んで出て来た。

「下駄がありましたら」

「ハイ只今」

と奥へ入つたかと思ふと、直ぐ持つて来る、新らしい下駄だ。

「済まんア、之れ履いてもいいのかい？」

「え、御遠慮なく」

「それぢや」

と、堅くなつてる緒の中へ足を突き込むでゐる、所へ、側口から芳子さ

ん姿を現はし、

「さア行きませう」

と促した。

「行つてゐらつしやいまし」

「行つてらつしやいまし」

二人は肩を並べて門を出た。

「どこへ？」

「いゝ所へ御案内しますわ」

と芳子さんは答へた。

「今日はね芝居があるのよ、御覧なさる」

「田舎の芝居なんか」

と、己れは一言の下に匆ねた。

「大方屹度左様仰しやるだらうと思ふてよ、でも一寸聽いて見たの」と

彼女は笑つた。

足は町を次第々々に刻んで行つた。

「オー此處が川か、やア彼處に橋がある」

「あの橋を渡るのよ」

「すると其れから？」

「大倉さんの別荘へ」

「他人の別荘なんか」

「でも其のお庭へ行くんですもの、公園みたいよ」

「誰でも入れるのかい？」

「えゝ」

「それぢや」

と、意の儘になつた。

橋を渡ると、別荘から薄明るい光りが洩れた、その光を頼りに二人は庭

へ出て、敷石を拾ひ歩むだ。

「危なう御座いますよ」

「大丈夫、男だから」

道は急に暗くなつた。

「君、大丈夫？」

と、今度は逆さに己れが訊いてやつた。

「えゝ」

と、云ひながら、何んだか心細さう。

「歩けないだろ、此處所へ案内した者が悪い、手を引きませうか」

「……………」

黙つて白い手が延ばされた。

「オツと其處にも石が」と到頭己れは握つた。

「矢つ張り男の方には協はないわ」

と、云ひつゝ、彼女はすがらむ許りに勢ひ餘つて己れに飛び付き「オー恐
かつた！」

「全く暗いなア」

と、己れは上を見上げながら呟やいた。杉の木立で空も分らなかつた。

「他見男さん」

「ウン？」

「二人限りだわねえ」

「ウン」

「ウンだつて！ 楽しかない？」

「さア」

「いやだわ其麼返事」

「ぢや君は？」

「そりや勿論！」

「勿論なアに？」

「勿論嬉しいんですよ」

「何うして？」

「何故でせうね」

味な事を云ふ。

「他見男さんは？」

又重ねて訊く。

「己れ？ 己れだつて男さ」

「ぢや矢つ張り……」

「勿論！」

「まア嬉しい。その言葉聞いた丈けで！」

「暗いなア、どうして斯う暗いんだらう？」

「森ですもの！」

「出ようか」

「え」

と、少々物足りないらしい返事だ。もう少し二人だけの世界にゐたかつたんだらう。

「ゆつくり出ませう、ね」

と、彼女は小さく囁きながら、後から随いた。

「オツと危ない、さア手だ、手だ」と己れは彼女保護の爲めに要求した
白い手が暗に躍つた。

「確つかり握つて、いゝか、放しちや轉ぶよ」

「放しませんわ、放さうとしたつて放れません！」と乙な文句で云ふ。

「ぢや大丈夫、そこにあるのは石だよ、氣を附けて」

「分つてよ」

「オツと何んだか踏んだぞ、こりや不可ない、君は其方を選んで」手か
ら汗が出さうだ。

二人は漸つとこさ坂を下りて窓からのあかるみへ來た。

「何うして君は彼處所へ案内したの？」

と、己れは訊かざるを得なかつた。

「だつて人に見られずゆつくりお話が出来たらうと思ふたんですも
の！ 私あゝした氣分が好きなのよ」

「女だてらに好くないぞ」

「でも好きだから好き」

二人は橋へ來た、橋を過ぎた、光さす町へ來た、それも過ぎた。二人は
宿へ戻つた。彼女は直ぐ隨いて來た。

「他見男さん、何日迄ゐらつしやるの？」

「明朝かへる」

「明日の朝？」

「ウン」

「何故？」

「何故でも」

「不可ないわ」

「だって一寸用があんだから」

「どんな御用？」

「會見の約束があるんだから」

「一日伸ばしたつていいぢやないの？」

「そりや伸ばしてもいいけど」

「お延しなさいよ、ね、で無いと私し淋しいわ」

黒髪の主は優しくも迫つた、己れの決心がにぶり出した。淋しいわが利いたのだ。



黒髪の

さしつかへなく

優しくは

くまなく

「ま考へて見よう」

「どうぞいゝ方へお考へを」

「さア」

「さアぢやありませんよ、ね、ね」

ね、ねが如何にも女の男を矯らす唯一の武器だ。

「折角お出になつたんぢやありませんか、それに晩來て朝立つなんて、それぢや何しに湯河原へゐらつたのか分りやしないわ」

「ハイ、ハイ」

「ぢやゐて下さる？」

「……………」

「又黙り込んで了つて。焦つたいわ」

所へ女中が上がつて來た。

「お嬢様、もう遅いからと母アさんが」

と、女中は足を折つて云つた。

「あら左様？」と振り向いて、再び向き直し、

「ぢや他見男さん、御ゆつくりお考へして頂戴な……………それではお就

眠み」

「やア失敬」

美しい姿は消えた。己れは獨りでぼゝえんだ。女中が床を伸べに來た。

己れは黙つて見てゐた。

女中も亦「おやすみ」と云つて消えた。

あとは森として河の音。己れは暫らくツクネンと頬杖ついてゐた。

何故の昂奮かそれは自分には分らない、疲勞からか、茶を飲み過ぎたからか、又は芳子さんを見た喜びの渦巻からか、或は又は夜具が變つた故からか、己れは幾度か轉々として碌々眠ることが出来なかつた。

雨戸をすかして薄いあかりが、部室へ洩れて來たのを見た時最早大分の時間だらうと思ふた。そして女中はさぞお疲れでよくお就眠になつてゐらつしやるんだらうと云ふ遠慮から、何時までも態と雨戸を明けないでゐるんぢやないかと思ふて、平生の己れの朝寢を想ひ出し、少しく氣の毒になつて、こりや自分から起き上がつてやる丈の機轉を利かさなくちやと其の儘ヌツクと身體を起してスタ／＼と湯槽へ下りて行つた。

誰もゐない、己れは靄でもかゝつてゐる様な顔を、明白させる必要上第

一に顔を洗つた。今度は口をと思ふた。あッ齒磨がない、楊子も勿論用意して出て來なかつた。すつかり忘れちやつてゐた。手を叩いて女中を呼んで取寄せようかと思ふたが、何だか云ひ出し難い様な氣がしたので、まゝよと其の儘手拭を指に巻き口の中へ突き込んで、コク／＼と擦つた。そして舌の上の白樺は前齒で巧みにコキ落して了つた、斯くて湯を口にし、アワアワアワさせ、ベツと吐き出した、斯くすること二三回、口の中は齒磨きを用ひたに近い成績を上げた。

サツと身體を流し、上つて來ると、何時の間にもやら雨戸をあけてある。欄干に立つと朝日は山の中腹まで光りあまねぎ、空あくまでも澄み切つて清爽云ふ可くもない。

そこへ女中が上がつて來た。

「お目覚めで御座いますか」

「オー起きた。一體何時頃だらう？」

「只今五時半ですよ」

「五時半!? さア失策つた！」

と、己れは思はず頭を搔いて、

「も一遍寝て了ふ」

「何うして、御座いますか？」

「だつて早過ぎる、此處に早く起きたら身體を遊ばす工夫がない」

と、云ひながら己れは其の儘又夜具へもぐつて了つた。

平生家にゐて大概眼を覺ますのが八時である。だから八時で無くちや起きるものではないと云ふ習慣がついてゐる。若しそれ以前に眼が覺めた

りしようものなら、何んだか寝不足でもしたかの様に思はれて氣が氣でない、習慣と云ふものは妙なもので、己れはいくら早く寝ても又遅く寝ても八時には必ず眼があく。その眼が五時半にあいたのだ。朝まだきの森羅萬象は流石にすが／＼しきものだと思つた。然し此處早く起きちや屹度寝不足の爲めに今日一日フラ／＼とした氣分がするに違ひない、それが何より厭だと思ふたんだ。然し人一倍神經の鋭い己れは一遍意識をはつきりさせた以上、再びまどろむことは何うしても出来なかつた、この時「眼を閉つてゐる丈けでも非常に身體が休まるものだ」と何日か云つてゐた弟の言葉を思ひ出して、己れは無理に眼を閉ぢてゐた、然し一旦朝日を眼に受けては、心は既に牙を切つてゐた。女中が茶盆を運んだり、火を持つて來たりする毎に眼はあいた。



遂に己れは仕様事なしに起きて了つた。
 例に依つて柱に身體を寄せながら、兩足を投げ出して、手を拱いてコク
 リとした。待てよ今日は午後二時頃に吉田と己れは會見の約束になつて
 ゐる、人一倍約束を重んずる己れは何うしても東京へ歸らなくちやなら
 ん様な氣がする。然し又思ひ返へして見れば己れは芳子さんの云分ぢや
 ないが昨夜此の湯河原についた許りだ、それを僅つた一晚切り一寸まど
 ろむだ許りで左様ならば餘りにあわたしい旅である。湯河原と云ふ所
 はどんな所か何處も知らずに、唯宿屋ばかりが湯河原の印象とは餘りに
 淡い思ひ出である。歸つてから必ずや後悔が強く迫つて來るであらう。
 何よりもウンザリするのはあの輕便である。思ひ出しても眉が獨りでに
 ひそみ出して來る。若し今かへるとなれば全て汽車に乗らんが爲めに湯

河原に來たり、又汽車に乗らんが爲めに湯河原を出る様なものだ。況んや己れは久振りで雑踏の東京を遁れて來た身である、せめて一日でも悠くり何も思はずに土に親しみたいが腹一杯であるのだが、如何せむ今日逢ふとする吉田と云ふのは己れの先輩であり、而かも會見の日は此方から通知して置いたのだ。若し己れがゐなかつたら、彼は屹度失望するだらう、失望よりも怒るであらう。さて何うしようか知らと己れは暫らく悶へてゐた。

「小田原行きは何時に出ます」

「朝の六時四十分が一番です」

「それから？」

「次は八時四十分」

「八時四十分、オ左様か」

己れは先づ参考の爲め訊いて置くといふ口付をした。

「矢つ張りお歸りになるんですか」

と、女中は訊いた。

「もう少し考へて見る」

「い、ちや御座いませんか、折角ゐらしたのに」

斯う女中は止め言葉を殘して下へおりて行つて了つた。

空を見ると如何にもよく晴れてゐる。己れは若しや今日一日滞在してゐて、明日になつて急に雨でも降つたら堪つたものぢやないと思ふた。旅には何よりも晴天である。己れは何んだか此の晴天が此の日限り見舞はない様な氣がした、出立して見たい思ひが心の隅々から小さな叫びを上

けて来た。

暫らくヂツとしてゐた己れは矢先に飛び上がった、そして慌立しく呼鈴を押した。

女中が上つて来た。

「八時四十分で立つから、その積りして自動車の方を」

到頭己れは宣言して了つた。

女中はハイと畏まつて下りて行つた。己れは俄かに氣がソワ／＼して来た。

愈々歸るんだ、斯う思ふと何んとなき嬉しい様な、惜しい様な氣が入亂れた。

□

廊下に人の氣配がしたかと思ふと、ビタリと止まつた。

「明けて好う御座んすか」

芳子さんだ。

「好うござんすとも」

と、己れは半分笑ひながら答へた。

すーつと開いた、オー綺麗だ、顔には化粧がもう濟んでゐる。彼女は座つた身體を両手で進めた。

「他見男さん、お歸りになるんですつてね」

と、妬まし氣に見上げる。

「矢つ張り歸ることにした」

「あんなに昨夜お願ひしたのに」

「然し考へた所どうも今日の會見が氣になるから」

「知らない、知らない、私しそんな事聴きたくない」と、身體をゆす振つて、

「他見男さん、何卒もう今日一日ゐらして頂戴な。ね後生だから、ね」

「さア——」

「さアぢやないことよ、今しがた女中が来てお嬢さま二階のお嬢さまのお知合の方が今立ちになりますと聴いた時の私の胸、いきなり飛んで來たのよ」

「あの女中黙つてゐて呉れたら好かつたに」

「何うして／＼今朝早くから、お嬢さま二階のお客様がお眼覺めになりましたからお話に行つてゐらつしやいなと私の顔を見る毎に勸めてゐた

んですよ」

「ホー、何う思ふて勸めるんだらう？」

「さア何んと思ふてるか、私の顔を見ると笑つてゐるんですよ、先刻もね其の女中が外の女中と密々話合つてるの、其處へ私が行つたら、ピタリと話を止めて了つてよ」

「ホー、己れを君の何かと思ふたんぢやなからうか」

「さア——」

と、美しく首を傾げて、

「宿帳に西川他見男とありましたか、アノ奥野他見男さんでせうと訊くんでせう、私いゝえと答へたの、そしたら屹度左様だわ、何んだか其氣がしてならないと云ふんでせう、私し仕舞ひに笑つたわ」

「何うして己れだと気が附いたんでせう？」

「あれでもお客様から本を借りて讀んでせう、立派な方だわですつて、そして御飯を喰べる時でもお茶を飲んでゐらつしやる時にも笑つて許りゐらつしやるつて。だから猶のこと感付かれたのよ」

「二人の仲を何んと思ふてるか」

「何んだか知りませんが、お嬢さまが急に元氣にお成り遊ばしたわと冷評かしてるの」

「お母さんの前で？」

「まさか」

と、打ち消して、

「そんな野暮な女中でもないことよ、伶俐よあの女中は」

「ホウ」

「ねえ他見男さん、ゐて下さいな。他見男さんの仰しやることなら何んでも聽きますから居て下さい、私し淋しいんですもの、昨夜は嬉しくて碌々寝やしなかつたわ」

「……………」

「散歩しようと思しやれば散歩もします、此の部屋にヂツとして居れと思しやればヂツとしてゐます、一日面白く遊びませうよ。私し嬉しいんですもの、私の爲めにゐて遣ると一言でも仰しやつて下さいな、ね、ね」あれ程云つて呉れる、そしてあの顔の美しさを見よ、色を見よ、黒髪を見よ、そして又得ならぬ異性の香ひ、香水のたゞよひ。

「ねえ他見男さん」

彼女は最う懸命であつた。

「よしッ、ぢや歸ることを止める！」

「止めて下さる？ 屹度？ あッ嬉しッ」

と、彼女は思はず拍手した。

「屹度ね」

「ウン」

笑顔が二人に交はされた。

其處へ女中が上がつて來た。

「もうお時間ですから、そろく御用意でも」

「いや止めた、歸らぬことにした」

「私が止めたのよ」

「お嬢さまには協ひませんわねえ」

と、女中はカラ／＼と笑つた。二人もツイ釣り込まれて顔を崩した。

全く芳子さん否黒髪の爲には男の心もグニヤ／＼になる。約束も會見も

あつたものぢやない。戀で無くて女で強いものだ。

「之で私も安心して階下へあります、いづれ後で参りますわ」

と、彼女は安心と勝利に微笑して一先づ引上ぐべく腰をあげた。

「オツと芳子さん？」

「え？」

「黒髪の爲に、あはれ強者と雖も」

「いやアよ」

と、白い齒を見せて。



「後で來ますわ」

朝飯を終つて、少し原稿を書き續けてると、又芳子さんが入つて來た。

「まア御勉強？　おや私し又來るわ」

と云ひながらも入りにく相だつたので、

「いゝや少つとも構はない、何卒」

と勧めた、芳子さんは「ではね」と媚びる様な眼付をして近寄り、

「どこかへお誘ひしてもいゝ？」

「そりや勿論」

と、ペンを止めながら、

「君と一緒なら！」

彼女はニツとした。

二人は外へ出た。

左に折れて下り、橋を渡つて小丘に來た、茶屋が一軒、芝生がズーツと續いてゐる。芳子さんは「公園よ」と云つた。今度は小丘の頂きから小道をたどると、俄かに溪流の音がする。

「行つて見ませうか」と云ひながら、芳子さんは先きに立つた。

坂を下ると御亭があつた、見下すと清流岩に碎けて白霧を散らしてゐる。巨岩至る所横はり、時に奇、時に怪、己れは木曾の寢醒の床に似てるナと口に詰つた、その癖己れは寢醒めの床を知らない。

二人は竹張りの席に肩を寄り付けて坐つた。

「何んだか楽しいわねえ」

と、白い手が己れの膝の上に載つた。

「新婚旅行みたいだね」と己れの手は其の上へオツ被つた。

その時二人の青年が下りて來た、兩人は慌て、手を外した。青年はニヤリと笑ひながら道をそれて行つた。「イヨー」と冷評すかと思ふたが、何も云はなかつた。姿が隠れて了ふと、二人の手は何時の間にか重なつた、そして眼と眼が物を云ふた。

「歩きませうか」

斯う云つて芳子さんは先きになつた、道の幅廣くなつた所へ來る度に二人は背に手をかけた。

御亭は未だ外に二つあつた、「紀念の爲め」「紀念の爲め」と云つては二人は一寸だけ腰をかけた。

此の邊皆大倉さんの別莊地で、殆んど遊覽に委してある此の形勝の地も悉く其の所有にかゝるものだと言ふ。大倉さんの別莊丈けでも此の庭園に三棟あつた、一軒丈けでも己れに呉れたら好さ相なものだにと思ひつゝ芳子さんに導かれた。昨夜危ない思ひをして敷石に迷ふた杉の森へ來た。「昨夜の所よ」と芳子さんはわざと云つた。

「ホーツ」

と己れはニタリと笑つた。二人は外に何も云はずに敷石を軽く飛んだ。宿へ歸つたら女中共は唯ニコ／＼として二人を迎へた。

「後でね」斯う云つて芳子さんは廊下から一先づ母の所へ歸つて行つた。

□

湯から上がつて、次室の十二疊の部室も占領して、己れは其處の片隅へ

机を押寄せて原稿用紙に向つてると、芳子さんが訪ねて來た、恰度その時持つて來た原稿用紙がもう書き盡された刹那であつた。

「こんな紙賣つてゐるか知ら」

と、芳子さんに訊いた。

「さアー」と云ひながら

「尋ねて來て見ませうか、紙屋へ行つて」

「いや、や大家の令嬢を使ひにするなんて濟まないから」

「いや、いや其麼事仰しやつては」

と云ひながら、芳子さんは駆けて行つた、程經て入つて來て、

「無いんですよ」

「困つたナ」

と、己れは折角気分調子づいてるのが何よりも惜しいと思ふた、猶この一日は斯うして書き暮さなくちや暮らす道がない様に思はれたし、家へ歸つたら兎ても此の氣乗りは覺束ないものをと其れが辛かつた

「此の通りの紙で無くちや不可ないの？」

「あれば何よりだけど、無ければ外の紙でも」

「ぢや一寸お待ち下さい。ね」

と、又下りて行つたかと思ふと、トン／＼上がつて来て、

「これで不可ないこと？」

見ると、女持ちの書簡用紙だ。

「これでも結構だ、買つて来た？」

「いゝえ私によ」

「濟まないねえ」

「何う致しまして、他見男さんの御用なら何んでも、私の及ぶ限り」

己れは全く感謝して了つた。

「みんな使つて了ふかも知れないよ」

「本望だわ」

己れはもう口が利けなかつた。二人は暫らく膝を崩して美しく物語つた。

□

晝飯が終つて、又原稿用紙にペンを走らし、疲れた儘に勝手に欄干に乾してあつた夜具を引き入れて襖近くに敷き伸べながら、其中へ身をもぐらせ、うつとり眼を閉ふつてる時、障子がすつと開いた。

「あらッお就眠になつて被居るの？」

と、驚いた芳子さんの聲がした。そして慌て、閉め去らうとした。

「構はない、構はない、どうぞ」

と云ひながら身體をガバと起し、同時にボンと飛び起きるが早いか夜具を敷蒲團から二つに折つて片付け、「さアさア」と云ひながら机の位置へ来た。

「他見男さん、之れお好き？」

見ると一輪挿に今苔みから開いた許りと云ふ様な眞赤なバラの花が、かさしてあつた。

「オー之は」

と、己れは彼女は何うしたら己れを楽しませることが出来るだらうと細心の注意を拂つてゐる好意に感銘の腫を捧げざるを得なかつた。

「いゝ香りですよ」

と、云ひながら自分で先づ嗅いで見て、

「それ」

と、今度は静かに己れの鼻のあたを花片でなぶつた。

「オー素敵だ、實にいゝ、殊に芳子さんが持つて来たのだから更にいゝ」と、其れを受けようとする、

「此處に置きますよ」と、彼女は机の上に其れを載せてニツと笑ひだ。花諸共に美しい。

「今ね一寸母の手傳ひしてますから、又あとでね」

と、左様ならを告げて行つた。屹度己れが折角床へ入つて頭を休めてゐたのを起したのが悪いと思ふたんであらう、再び己れを休ませむ爲めに

此麼優しい口實を作つて姿を隠して了つた。己れは唯感服の首肯を續けるのみであつた。

床へ入つたり、起きて書いたり、その裡夜の帷が下ろされた。

□

夕飯が済むと又遣つて來た。

「他見男さん、女中に今夜芝居見にゐらつしやると約束したの」と、訊く。

「田舎廻りの芝居が來てゐると云ふ話は聞いたが、そんな約束はした覚えがない」

「だつて女中が云つてましたよ、今夜御嬢様とあの御客様と三人で芝居に行くんだつて楽しみにしましたよ」

「知らないよ、田舎の芝居なんか」

と、己れは鼻で扱つて云つた。

「ぢや聽き違へたんでせうか？」

「君行きたい？」

「あんな芝居なんか」

と、矢つ張り相手にせぬ。

芳子さんは今から町の中を案内しませうと云つた。

宿を出て導かれる儘に歩いて行つた。宿屋と云ふ宿屋、それを一々彼女らは名を云つて知らせた。その途すがら此の湯河原は客種が非常に品がよく、従つて女中の風儀の正しいことは全國稀れで、藝者は小田原から來るが、來ても酒の相手より外三味線一つ鳴らさない、三味線を鳴らして

ワイ／＼時に騒ぐ家は〇〇屋ばかりだ相です。だから私共だの他見男さん見たいな方には持つて来いだわねえ、静かでせうと云つた。

「女中が何うの、藝者が何うのつて誰に訊いたんだい？」

と、己れはよく其藝事を此の令嬢知つてゐる哩と好奇心に訊ねた。

「母が云つてました、宿のおかみさんも云つてました、母はだから湯河原なら私を連れて来ても差支へないと云ふ意見でせう」

「君のお母さんは慇巧だね」

「え、慇巧よ、その癖斯うして他見男さんと遊ぶことなんか捌けてゐるんですよ、寧ろ薦めてゐるんですよ、妻子のある方だからと信用してゐるのよ」

と、芳子さんが笑つた。

「も一度朝行つた御亭へ行つて見ませうか」

と、彼女は勧めた。

「暗しよ」

「又暗いが始まつた、いゝぢやないの」

「僕は構はぬけど」

「ぢや行きませうよ」

朝の如く橋を渡り、別荘を抜けて御亭へ来た、白い手、柔かい肩、それは屢々危険と思はれる度に己れに依つて支へられた。

宿へ歸ると間もなく雨がポツリ／＼と瓦を打つた。

寝るには時間が早い。原稿も疲れた故か書く氣がしなかつた、何うして時間をつぶさうかと困つてゐる所へ、女中が上がつて来た。

「お芝居にゐらつしやいませんか、私し今行つてゐらつしやるお客様をお迎へ旁々参りますから」

その時芳子さんが入つて來た。

「さア」

と、己れは煮え切らないでゐると、

「母がね、他見男さんがお退屈でせうから芝居にでも御案内したらと今云つてましたよ」

と、芳子さん迄口を出し、

「私し別に行きたくないんですけど」と附け加へた。

女中は「参りませう、参りませう」と幾度か我々と一緒に歩きたいらしく願つた。その女中は感じのいい、温順しい女だつた。己れは終ひに氣の

毒になつて、

「ねえ芳子さん、一寸行つて見ませうか」

「他見男さん被居るなら行つてもいいわ、詰らなかつたら直ぐ歸ることにしてね」

「ぢや行かう」と己れは女中を向いた。

「あッうれしう」

斯う叫んで女中は一散に下りて行つた。屹度鏡に向つて容姿を作る爲めだつたらう。

帯を絞め直して下へおると、雨は止んでゐた。女中は態と芳子さんと己れを並べて歩かした、氣が利いてゐる。

小屋は馬小屋みたいに汚なかつた、客と云ふ客の大方は労働者や汚ない

山の神であつた。浴衣着の者所謂旅の者はホンの三人か四人しか見えなかつた。

女中は二人を二階へ導いた、そこには迎へに来た客の顔があつた、髭ひさぐるしき顔の紳士と娘が其れであつた。女中は「お迎へに」と云つて近づき、同時に我々の爲めに座席を作つて呉れた。客と己れとは互に挨拶した。

恰度幕が下りてゐたが、坐ると直ぐ其れが上がつた。軍人が出て来た、肴屋が飛び出した二人は友達だつた。軍人になつたから威張るない、俺ア昔てめエに算術を教へて遣つたぢやないかと肴屋は鼻呼吸が荒かつた、とどの詰り軍人は鰻飯を肴屋に奢つて遣ふことになつて二人は入つて了つた。入り換りお腹が空つた腹が空つたと云ふて一人の配達夫が來

て、の、い、れ、ん、の、中、を、覗、い、て、そ、ば、を、註、文、し、た、そ、の、そ、ば、を、喰、つ、て、る、所、へ、汚、な、い、女、の、乞、食、が、矢、つ、張、り、空、腹、じ、い、く、と、遣、つ、て、來、て、隙、を、窺、ひ、そ、ば、を、搔、き、拂、つ、て、口、へ、入、れ、た、所、を、亭、主、に、見、付、か、る。太、い、野、郎、だ、と、踏、ん、だ、り、蹴、つ、た、り、し、掛、と、配、達、夫、が、ま、ア、と、止、め、俺、が、其、の、代、を、拂、ふ、か、ら、と、許、し、て、貰、ひ、聽、て、顔、見、合、せ、て、「お、母、さ、ん、か、」伴、か、「め、面、目、な、い」と、さ、た。そ、こ、ま、で、見、て、ゐ、る、の、が、辛、抱、の、骨、頂、だ、つ、た、到、頭、己、れ、は、し、び、れ、を、切、ら、し、て、歸、ら、う、と、云、ひ、出、し、た、芳、子、さ、ん、は、一、二、も、な、く、賛、成、し、た。然、し、女、中、は、迎、へ、に、來、た、二、人、の、客、の、爲、め、に、残、ら、な、く、ち、や、な、ら、な、か、つ、た、そ、れ、に、女、中、と、し、て、は、此、の、芝、居、が、面、白、か、つ、た、ら、し、い。木、戸、口、ま、で、送、つ、て、出、て、又、急、い、で、中、へ、引、込、ん、で、行、つ、た。時、計、を、見、る、と、入、つ、て、か、ら、出、る、迄、十、五、分、し、か、經、過、ら、な、か、つ、た。

「フン」

と、餘りの馬鹿らしさを見た己れは鼻で相手知らず冷笑して歩いた。

「本當にねえ」

と、芳子さんは己れの意を迎へる様に相鎚を打つて、

「でも此麼汚ない小屋もあるものだ、いゝ御参考だわ」

と、餘り失望させまいと思ふてか、斯う云つて彼女は己れを慰めた。此

麼人を嫁に貰つた人は屹度幸福に違ひないと、己れは芳子さんの總てに

穏やかな態度が譯なく氣に入つた。

二人は明日を約して宿の玄關で上と下に別れた。部屋附の女中が右の如

く芝居見物にあるので己れは他の女中を煩はすも可哀想と、靜かに押入

から夜具を勝手に出して勝手に敷いた。女中が見付けたら、「アレーマア



女房の方を
裏向き馴れ
あつから
すつとま
清水一軒ま

濟まないお客様に！」と断腸の思ひがするかも知れぬけど、此の御客様は家にゐちや毎日唯に自分の寢床のみならず女房の分まで敷き馴れてゐるから少つとも御心配なく。

□

愈々今朝は去らなくちやならぬ、芳子さんと離れなくちやならぬ。眼のあいた時間の都合に依つて、出發を定めることにした。起きたのは矢張り昨日と同じく五時半であつたら出發は一番列車に定めた。朝湯から上がつて欄干にもたれてゐると、芳子さんの姿が見えた、芳子さんは鶏に餌を與へてゐた、後姿であつたけど浮き出た様な頸首の白さ、己れは思はず微笑した。着物も着代へてゐた、その柄のよさは一層彼女を極立たせて美しく見せてゐた。

呼鈴を押して女中を呼び、茶代と女中への祝儀を持たせて遣つて宿料の書附を要求した。次に上つて來た時御飯を運んだ、箸を動かした時間を見ると殆んど迫まつゐる。

「飯は自分で喰つてゐるから早く書附けを」

と、己れは女中を急がした。

「あの御勘定は宜しい相で」

「え、ッ、ど、ど、何うして？」

と、己れは驚いて了つた。

「そりや何麼譯か知らぬが、不可ない。直ぐ貰つて來てくれ」

と、變なことがあるものだ、何うして女中は其麼事を云つたんだらうと小首かしげた。女中は自分も其の譯が分らぬと云つた風に下りて行つた。

入り換はり、主人が上がつて来た。

「只今は過分のお茶代を頂戴しまして」

「いゝや」

と、己れは頭へ手を載せて眼を疊へ落した。

「あんなに頂いては宿料はもう何んで御座いますから」

「そ、そんな事が、茶代は茶代、宿料は宿料ですから」

「いゝえ決して御心配なく」

「それぢや此方が却つて困るから」

「いゝや、もう〜」

と、主人は手を振つて、

「どうぞ又是非お出下さる様に」と云ひながら慌て、階下へ下りて行つ

た、入り換はり女中が交々御禮に来た。

困つたこつた、あんなに云はれちや此の次から来るにも来られやしな
い、待てよヒヨツとすると芳子さんのお母さんが拂つて呉れたのかも知
れない。若し左様だつたら！ いや屹度さうだ、こりや大變だと思ふた
ので、再び呼鈴を強く押し、もうすつかり身を堅めてイザと云ふ姿にな
つて、手早く財布から紙幣を取り出し、大方この位だらうと思ふ程を傍
にあつた電報用紙に包み、サラ〜と宿料と書き終つた所へ女中が何用
とばかり上がつて来たから、

「ねえ君、之れはね僕が自動車に乗つて了ふまで決して主人へ出しちや
不可んよ、私の姿が見えなくなつて了つてから、あの御客様が置いてゐ
らつしやいましたと云つて渡してくれ、いゝか、それ迄堅く秘密だよ」

女中はまア妾どうすればいいか受取つていいか悪いかと半分うろ／＼となつた。

「早く、早くつてたら、時間が無いから」

と、無理に掴ませるが早いか己れは一散に下へおりた。

あゝしないと女中が今下へ行つて直ぐ主人に渡して了ふものなら、こりや不可ないお返ししなくちやと又上がつて来るに違ひない、要らぬと己れは云ふ、受取れませんかと主人は返す、その間に肝心の時間が外れて了ふのだ、見よ自動車が停車場まで出發するに後五分しかない、愚圖々々云つてたら屹度遅れて了ふのは解り切つてゐる。立つ時間に立たないと不快なものだ、それに話が斯うなつたら何んとなくバツの悪いものだ。それに又あゝして置いたら、よしんば芳子さんのお母さんが出したもの

にしる、お客様がお立ちになる時無理に置いて行かれましたからと、出された分を其の儘お返しすることが出来る。そしたら己れも安心だ。

何故芳子さんのお母さんはあゝ云ふことをされたんだらう、不思議で堪らない、屹度昨日一日芳子を遊ばせて下すつた、芳子が無理に止めたからあの方は滞在を餘儀なくされたんだ、して見れば宿料は此方で拂ふのが當然だと思はれたのかも知れぬ、己れは何んだか其處等々が氣極りが悪くてならぬ。

靴を履いて玄關へ出ると、もう主人を始め女中と云ふ女中が行列して見送りに出てゐる。

「又どうぞ」

「どうぞ又」

「お近い裡に」

各自の口から浴せられて己れは誰お辭儀ばかりしてゐる所へ、芳子さんがヒョククリ樹蔭から出て來た。

「私し停車場までお見送りしますから」

美しい顔の赤い唇から洩れた。己れは敢て拒まなかつた。人達も亦敢て奇異に打たれた様な眼色もしなかつた。

「それぢや皆さん」

と、改めて大きく一つ己れは挨拶した。

「行つてゐらつしやいまし」

「行つてゐらつしやいまし」

と口々に云つて首を下げた途端、先刻二階で宿料を渡した女中が飛んで

來た、そしておかみさんにコソ／＼と耳打した。己れは直覺的に「到頭喋べつてるナ」と思ふた、此慶事をなすつてはと追ッ駆けられちや危険だと己れは一散に自動車の場所へと駆け出した、芳子さんも面白がつて追ふて來た。

ヒラリと乗る、芳子さんも乗る。乗合自動車だけど、朝早い故か乗客と云ふものは二人限りしかない。己れも芳子さんも世の中に此慶幸福のいゝことがあるかと云ふ恐悦至極な顔と眼を交換した。

動き出してから、芳子さんが云つた。

「ねえ他見男さん、之ね」

と、新聞紙で包んだものを差伸べて、

「これね持つて歸つて下さいな」

「なアに？」

「私が造へた肱突よ、記念の爲めに。受けて下さる？」

「喜んで頂戴する。一寸見たいなア」

「ではね」

と云ひながら包みを開いて見せる。紫の梅鉢が白い縮緬から浮んでゐる。

「素敵だなア」

「之が他見男さんの肱突の用をなしたらどんなに嬉しいでせう、光榮だわ」

「いや僕こそ」

と手に取つて見る。軽くて厚い、屹度綿がいゝからだらう。

「外に之も」

と、その下になつてゐた紙入様のものを出して、

「之はね電車の切符でも挿んで頂戴な」

「君が拵へたの？」

「え」

「何日拵へたの？」

「此方へ參つてから暇々に」

「さう、有難う、心から喜んで受ける」

「私もそれを聞いた丈で心が一杯だわ」

二人は共々に喜んだ。

「芳子さん全で二人の爲めの自動車だねえ」

己れは歡喜に満ちて云つた。

「他見男さん、私しもう何も云へません」

斯う答へて芳子さんは白い手を己れの膝に載せた。

陽光は此の時もう人を照らし、家を照らし、田野にあまねいた。感激は譯もなく轟々と迫まつた、何物と雖も此の上の讚美は二人に與へられなかつた。

自動車から下りると同時に熱海からの列車が遣つて來た。

「恰度よかつたね」

と、己れから先きに飛び下りた。芳子さんが續いた。

「お乗りなさい、早く」

と、彼女は動き出したら大變だと急いで己れを唆かした。それぢやと直

ぐ列車を目掛け飛び乗つた。その二等室には浦若い女が一人乗つてゐた、今乗つた許りらしい、窓から首出して茶屋のおかみさんと話合つてゐた。

己れも首出した。

「貴方、切符を買つて上げませう」

と、そのおかみさんは己れを見て云つた。

「オーそれぢや」

と、云ひながら、

「幾價？」と、財布を出した。

おかみさんは答へた。己れは渡した。

「お嬢様、お早う御座います」側にゐた芳子さんが顔見知りなのか、お

かみさんはニコ／＼聲をかけながら、小さい窓口へ行つて切符を求めて来た。

己れは受取つて、幾分禮しなくちやなるまいと思ふたので、その釣銭の裡から小さい紙幣をつまみ出して、「おかみさん」と呼びながら其れを握らさうとした。

「なに之れ？」

と云ひながら、

「要りません、要りません、いゝえ要りません」

と、身體を遠ざけて手を烈しく振つた。己れは仕様事なしに財布に收めた。そして矢つ張り田舎の人は質樸だと、却つて我れと我が行爲に少しく氣極り悪い思ひした。

「他見男さん」

と、芳子さんは此時近寄りながら、

「もうお別れね、何うしませう」

「仕方が無い」

と、己れは顔を外して淋しく笑つた。

「その裡私も歸りますから」

「いつ頃？」

「さア何日頃か、母が少し病身なものですから」

「オーすつかり忘れてゐた、實は今朝宿屋で宿料を何うしても受取らなかつた、君のお母さんが拂つたんだろ」

「さア知りませんわ」

と、何故か笑つた。

「知つてゐるだらう、後生だから云つて呉れ」

「そんな事何うでもいい、ぢやないの」

「よくないから訊くんた」

「私し存じません、存じません」

と、首を仰山に振る所どうも知つてゐるらしかつた。けれども己れがあゝ云ふ具合にして女中へ渡して来たから、宿へ歸つてから芳子さんはさぞ驚くだらうと其の話は其れで打ち切つて了つた。

「オーイ出すぞッ」

と、此の時機關士みたいな男が呶鳴つた。

「暢氣な汽車だわねえ」

と、芳子さんは笑つて了つた。

己れは此の二等室に若い女性と二人限りになつたことに就いて芳子さんは何う感じてゐるだらうと先刻からヂツと其の顔色を讀まうと心掛けてゐたが、芳子さんは時々妙な笑ひを洩らすより外一言も云はなかつた。小さい嫉妬心が必ずや湧いたことであらう。時々話の切目毎に面白からぬ漂ひが芳子さんの顔に浮ぶ様に思はれてならなかつた。

己れは「大丈夫だ、話一つ交はすものか」

と、時々フンと其の女を鼻でハチク素振りを見せては芳子さんを安心さす可く務めた。

汽車は動き出した。

「それでは」

と、引き付ける様な眼で見上げて芳子さんは叮嚀に腰を屈めた。

「やア」

と己れも軽く答禮した。此の「やア」は平常の「やア」と違つて感慨無量、盡きやらぬ情緒の纏綿さが含まれてゐた。一つには彼女が此れ限りで其の儘嫁入りして了ふ様に思はれて仕方がなかつた故もあらう「他見男さん、或は之れ限りかも知れません」と昨日部屋でツイ洩らした時「ぢや愈々嫁くんですか」と聞いたら、唯笑つてゐたが、それが何となく淋しく己れには受けられた。今此の停車場では彼女は其の言葉を忘れた様に「その裡私も歸りますから」と云つたけど、「そしたら逢へますわ」とは流石に迂らさなかつた。

恐らく之が名残かも知れない、名残なればこそ、あゝまでして、全で戀

した仲の様に私に振舞つて、己れと云ふ男と云ふ者と思ふ存分語つて、そして處女時代の最後の頁を飾つたのかも知れぬ。それだから蔭ながら無理に止めたのであらう、あながち單に淋しいからと云ふ名目のみでは餘りに其の眞情が一面識の私に對して深か過ぎてゐた様に思はれて來る。

己れは容易に首を窓の中へ引込めるに忍びなかつた。けれども遂に其の白い顔は何日迄も續かなかつた。

窓を閉めてから己れは一しほ淋しかつた。

女に別れた許りの男の心は總てに寛容であつた。來る時あれだけ罵つた此の輕便鐵道も歸りにはさまでに苦にはならなかつた。焦々いらくとしてゐたあの時の感情は何日の間にか軟かに且つ穩かに伸びてゐた。女

性は何うしても男性に缺く可からざるものである。列車の中の女は何か己れが口を切り出すかと待つてゐた様な様子であつた。然し己れは相手にしなかつた。その女が本當に己れの口を開かせる丈けの美觀を有してゐたのなら、芳子さんの前でよしんば無言を誓つて來ても己れは必ずや二言三言ことばを掛けたかも知れぬが、其の女は芳子さんに比して餘りに懸隔があつた。ヨリ好い女に充分に飽滿して來た此の男はヨリ悪い女に何うしてゞも口を切る氣にはなれなかつた。己れは先方から話かけて來たら仕方なしに應對して遣らうと云ふ程に西園寺公みたいに濟まし切つてゐた。

驛々から客が次第々々に乗つて、遂には入れ切れなくなつて了つた。彼等は大方それ／＼顔知合らしかつた。そして彼等は其の多勢を恃んで態

とみだらな事を面白氣に、否聽へよがしに高らかに云ひ合つては其の女の顔を見たり、又己れの顔を見たりした。己れは一つは女の手前、一つは此の列車の中での謹嚴な顔付の手前無理に苦虫をつぶした様にして顔を反けた。

小田原で下りて電車を待つまでの間をと來た時立寄つたさかい屋待合所へ入ると、ゐらつしやいと云つては呉れたが、皆廢誰一人己れの顔を覺えてゐるものが無かつた。來る時可成の茶代を奮發して遣つて置いたに己れは小々氣に喰はなかつた。ツク／＼茶代は其の場限り、以後餘分は謹しむ可きことだと却つていゝ參考になつたと思ふた。

國府津行の電車はと訊くと今出た許りだと云ふ。次はと續いて訊くと、卅分ほどお待ちあれと云ふ。又待つのかと思ふと厭になる。自動車は？

と訊ねると之れ又四十分お待ちあれとある。國府津小田原間の電車は矢鱈に止まるので懲りてゐたから、どうせ遅れたのなら少し位遅れたつて構はないと、自動車に乗ることに定めた。

恰度その日の新聞がテールの上にあつたので隅から隅へ眼を通してゐる時電車が来た。知らん顔して又新聞を見てると、今度は自動車だ。己れは立上がつた。

其の自動車には外國人ばかり乗つてゐた。

いくつかの町を過ぎた頃、外へ首を出してゐた年老の外人が突然山の方を指して、

「マウント富士？」

と、己れを振向いた。己れは慌て、指された方を眺めた。殆んど大半は

雲に蓋はれてゐたので、形がサツバリ見當が附かなかつたけれど、雪のなだれた様に富士と直覺し、大膽にも「イエス」と断定を與へて了つて遣つた。すると其の老人は狂喜して外の連中に之を知らせた。中には再び己れに聴き直したのもあつた。己れは相變らず「イエス」と剛情張つて動かないで遣つた。

ハテ眞實富士か知らと己れは答へた後で考へ込んだ。

あの邊には此の季節雪を戴く様な高い山が無い筈だ、あつたか知ら、いや何うしても無い、無ければ矢つ張り富士だビク／＼するな。

それにしても己れは單に「イエス」とのみ簡單に答へたのが物足りなかつた、何故もつと形容たつぷりで感嘆せしめなかつたらうと悔んだ、彼の問ひはあまりに突嗟であつたから、己れも「イエス」より方法が無

かつたが、今度又何か訊いて見ろ、斯う云つて遣るぞと己れは色んなフ
 レーズを口の中であみ出してゐたが生憎それからチウとも問ひかけて
 來なかつたので張合の抜けること夥多しかつた。ぢや何んとか少し説明
 して遣らうかなと思ふてる裡に、視線はもう富士から遠かつて自動車は
 國府津驛前で止まつて了つた。

國府津から東京まで奇もなし異状もなしで唯一直線

輝ける旅へ

鎮目さん一家が今年も亦伊豆伊東温泉へ一家擧つて出掛けると聞いた妻
 は羨ましさには堪えない顔をした。そして「鎮目さんの奥様は本當に幸福
 な方だわ」と暗に貴方も私をもう少し可愛がつて下さるものだと其れ
 となくアテ附けがましく云ふ。その時己れは何故か馬鹿に御機嫌がよか
 つた、だから

「そんなに行きたけりや君も行つたらどうだ？」
 と、捌けたことを云つた。

「あんなこと云つて！ うっかり本當にするものなら直ぐ赤ンペーと來
 るんですからねえ」

と、膝にもたれてゐる静子の頭を撫でながら云ふ。
「イヤ本當だよ、己れだつて偶にや豪い所を見せるさ、なアに妻を温泉に遣るなんか譯ないよ、いッ行つて来い」

「本當？」

「本當さ」

「しッ、しッ、しめたッ」

と、妻は突然静子を疊の上へ投げ出して、にじり出て、

「貴方は前途有望だわ、わたし大好きよ」

と云つて、

「行きますよ本當に、本當に私し行きますよ」

「行きたまへとも！」



「ぢや家は何うするの？」

「お母アさんがゐるぢやないか」

「そりや左様だけど貴方私がおないので淋しかない？」

「淋しいものか、猶結構だ」

「左様でせう、屹度毎晩夜遊びなさるでせうね。誰も叱るものがないから」

「うゝや」

と、己れは済ましたもの、然し内心あすこへ行つて遊んでやれ、こゝへ行つて遊んでやれと大に思ふ。

「ねえ貴方、お母アさんは恐がりだから毎日早く歸つて上げなさいよ」

「分つとる、分つとる」

「お菜にも小言云ひなさいますな、私と違つてお母アさんは親ですから小言云つちや不可ないことよ」

「そりや左様さ」

と、潔く受けて、

「決して家のことは心配せずに思ふ存分遊んで来たまへ、己れは何日か静かな気分になつて少し原稿を書きたいと思ふてゐた矢先さだから専心それ勉強する、原稿が間に合はないで困つてゐることを君も知つてゐる、夜遊び所か毎晩二時三時まで起きてゐなくちやならないだろ」

と、如何にも彼女が納得する様なことを並べて安心を齎らした。すると、根が執方かと云へば云ふた儘になる彼女として、直ぐ其の氣になつて良人の品行を確信し、その確信が付くが早い日頃往來してゐる友人の所へ

飛んで行つた、云はずも知れた「わたし温泉へ行つて遊んで来るわ、素敵よ、あゝ湯の香りのなつかしさ」と許り、ビヨン／＼と羨しさに飛び上がる文句を並べて来て、意氣揚々我が良人の男らしい果斷之れ見よがしに振舞つたんだ。

歸つて来るや、

「貴方、貴方も見送り旁々一緒に来て下さらない？ 偶には温泉の一夜

もいいことよ」

温泉の一夜で巧みに引き付け様とする。

「いゝや僕は行かれない、原稿で忙がしいから」

と、又も原稿を引合に出して危く難をのがれた。

「それぢや鎮目さんと御一緒に行くわ、貴方済みませんが鎮目さんが何

日お出立になるか訊いて来て下さらない？」

「ウンよし、よし」

己れも柔道初段の癖に何うして斯う女房にや弱いんだらう、その原因が分らぬ。

その晩鎮目さんへ行つて訊ねると、良人はもう一足先きに伊東へ出掛けてゐますと云つて、私共は此の二十五日に日出子と二人で立ちます、奥様が一緒なら旅の空も面白く伊東まで知らず識らずの中に行つて了ふでせうから、是非どうぞと鎮目夫人宣うた。

出發時間を訊いて、それぢやお供さしてと云つて、家へ戻つて此の旨妻に傳へると、一寸お待ちなさいと何故か指を折つて、

「その日は都合が悪いことよ」

と云ふ。

「どうして？」

「身體の具合の悪い頃ですもの！」

「身體の具合の悪いと云ふと？」

「男の聞くことぢやありませんよ」

と云ふ。ハテナ。

ハ、アン分つた。

「あれかい？」

「左様よ」

「構はないぢやないか」

「そんな亂暴なことが出来ますか」

「左様かなア、ぢや延期か、又は即刻立つか」

「日延した方がいゝわ、そして鎮目さんの御主人に手紙を出して部室のいゝ所を頼んで置きませう、でないといふと今行つて直ぐ部屋があるか疑問だわ」

「ぢや君は何日出立するんだ？」

「左様ね」

と、又指を折つて、

「二十八日なら可いわ」

「二十八日、御ゆつくりだね」

「その間に色んな準備をしなくちや」

其れから妻は平常着と晴れ着の間の着物を一枚拵へたいとある。ウムよ

し。其れから又静子にも一枚ときた、それもよし。

鎮目さん母娘から「お先きへ行つて待つてます、是非お出下さい」と間もなく妻は其變ハガキを受取つてから愈々一日千秋の思ひをして二十八日の日待つた。「私は汽車が弱いから、是非誰か見送つて下さらなくちや萬一の時静子が可哀想ですから」と前日になつて妻は何んだか急に母娘二人限りで旅へ出るのが寂しくなつたのか、斯う駄々をこねた。そして「其れには貴方が来て下さるなら申分もないんですけど」とある。此變時には我輩亭主儀謹んでモテる。

「僕は不可ない、氣が乗らない、その代り迎へには屹度行く」

「さう」と聊か物足りないらしい。

「湊を何うだ？」

「湊さん？ 湊さんでもいゝわ、でも學校が」

「さア大學は休みが多いから、電話で聽いて見よう」

それから弟に電話をかけた、君伊東へ行かないかと云つたら、わーア嬉しいなアときた。明日だよと云つたら、わーア猶々嬉しいなアときた。それぢや其の積りでと云ふと、彼は二時間も経たない中に宙を飛んで來た。

そして「今日は此方で泊る手筈にして來たから」と云つて「此の間から何處かへ旅行したいと思ふてゐた矢先だつた」と弟は心から歡喜の叫びを上げた、況んや伊東には鎮目さんがゐる、奥様がゐる、日出子さんがゐると云ふ具合に話相手がどつさりゐるから、益々面白いと意氣昂然たるものがあつた。

斯くて翌日妻及び静子並に弟の三人は晴れやかな笑みを洩らして新大久保から伊豆の國伊東へ向けて立つて行つた。

闇の聲

「おん身、愛したまうや」

彼女は云ひぬ。

「必ず！」

男は答へぬ。

「永久に變らじとや」

女再び云へり。

「魂の生くるまで！」

その聲や強かりき。

秋の來らば

秋の來たらば我れ淋し

石、去りたらば猶淋し。

あかき紅葉よ燃えてくれ

あかき血汐よ燃えてくれ

君戀しさに

君戀しさにとぼくと

門をいづれば母よひぬ。

「SUNNY」

「……………」

母よ、われ若きものを。

あゝ我が母よ、われ若きものを。

戀にすがりて

戀よ、我が扉を開け。

戀よ、我が惱みを捨てよ。

戀なき人の淋しさに、

我れも泣かすな月見草。



お馬鹿

「ねえ他見男さん」

と云ひながら、或る知つた女性が己れの傍へ寄つて來た。

「？」

と、己れは振り向いた。

「ねえ他見男さん、私の知つた方の妹さんが是非他見男さんを一寸見たいんですつて、いゝ？ 不可ない？」

私は唯笑つた。

「その方ね、今△△女學校の上級生よ、私し他見男さんの話をするよ、まア貴女他見男さんを知つて被居るのつて突然飛び付くの、吃驚しちや

たわ。えゝよく知つてますよと云つたら、是非々々どんな方か見せて欲しいと云ふのよ。でね、私しちや夕方方の五時頃に私を訪ねて被居い、その頃他見男さんは屹度一寸顔をお出しになるからと云つたの。それちや屹度ねと云つて、昨日夕方方ゐらしたのよ、ところがホンの一足で、それも僅つた二三分前に他見男さんがお歸りになつた許りでしたのよ、私も悲觀したけど、その方も悲觀してよ、又來るわと仰言つたけど折角來たのに可哀想でしたわ」

己れは相變らず黙つて笑つてゐた。

「ねえ、他見男さん、その方ね他見男さんに面と向つては恥かしいから、どこからか隙見をしたいと仰言るの、それなら他見男さん構はないでせう？」

「隙見なんかしなくたつて、堂々逢つていゝぞ」

「屹度恥かしがつてよ、でも喜ぶわ」

「然しAさん、逢ふにしては突然ぢや不可ないよ、一寸前に報らせて呉れなくちや」

「どうして？」

「君の知つてる通り、己れの顔には非常にムラがある、或る時には自分ながら惚れくして此麼男ツ振りか世の中にあるかと思はず額を叩いて悦に入る。然し又或る時には何んだ此の顔、こんな顔は世間には大磯の蛤の様にザラにあると思ふてウンザリする。

そこでだ、同じ見せるなら矢つ張り眉目秀麗な他見男さんを見せて、流石は他見男さん、それはく素敵よと友達から友達へ、又その友達から

友達へと吹聴されたいんだ。それをウンザリした時の他見男さんの顔を見られて見い、ね他見男さんて世間の人ワイく云ふ程の好男子でも何んでも無くてよ、私し一目見て悉皆悲觀しちやつたわ、大磯の蛤よと云はれちや己りや大不賛成だ。

だから君から何日に他見男さんを屹度見せてあげるから其の時屹度ゐらつしやいと日を定めて云つて遣つてくれ、すれば己れはソラ此處を綺麗に剃つて、洋服の皺も伸し、賑やかな所をピョンく歩いて来て晴れ晴れしい顔付をして入つて来る、その時逢ひたいのだ、そして屹度感激に打たれるだらう、そして三人で日比谷公園を散歩しよう、その時己れは貴公子みたいな發音でなめらかな聲を出して會話をするから、笑つちや不可ないよ、君は己れのアラと云ふアラを知り過ぎてゐるから、一

寸困るんだ」

「まア他見男さんのお顔を拜見する時には、拜見する者より、拜見される方が大騒動だわねえー。あたし可笑しくなつて傍にゐられやしないわ、ぢや斯うしませう、その方は姉さんと一緒にどうせ被居るんですから、姉さんと妹さんと他見男さんの三人で何處へでも遊びに行つたら何う？」

「悪くないね」

「ぢや私し手紙を出すことよ、さう？」

「何日にする？」

「明日にしませうか」

「明日？ 宜しい」

斯くて翌日己れは天上天下之れ見よがしにお風呂から上がった許しの顔をして遣つて來た。少くも其れには時と精神を費つて來たことは非常なものだ。

所が其の女性が「他見男さん此慶返事が來たのよ」と差出すハガキを見ると「萬止むを得ざることがありますので折角ですがお伺ひかねます。何れ此方から參上の日を申上げますから其の節是非他見男さんに拜顔の榮を。取り急ぎの儘あらう」

何があらうだ。己れは折角の天下一品振りを見事斯うされたので、思はず自分で自分の頬べたを振り上げながら「お馬鹿だよ、お馬鹿だよ!!」

ダンス見物

「フと今日の日曜は鶴見の花月園へ行つて見ようかなと思ふた。」

それは外でもない先日このあひだの晩鈴木君の家へ遊びに行つた時、程経て又大橋君がやつて来た。雑談の末、僕等二人に、

「鶴見の花月園へ行きましたか」

と、大橋君が訊くから、二人は共々に「いや」

と首を振ると、

「素敵ですから、兎も角行つて御覧なさい」と云ふ。何が素敵だと訊く

と、花月園には今度新たに西洋舞踏場が出来て、そこへ行つて見給へ、内外人が盛んに入り亂れて踊り狂ふてゐる、唯に内外人ばかりと云ふな

ら興が無いが、窈窕花の如き美人、それは皆日本で知名な人の奥様か令嬢ばかり。或は金髪の乙女、或は秀麗な貴公子、それ等が歡樂に酔ふて夢中に踊つてゐる。全で天長節に外務大臣の夜會に聘ばれた様な、それとも又帝國ホテルのクリスマスの夜のさざめきの様な何んとも云へぬいい氣持ちになる。貴方々みたいな新智識を吸ひたがりが彼處を知らないとは話せませんねえー」

と、大橋君躍氣となつて云ふ。

鶴見の花月園に舞踏所が出来て、そこで舞踏を教はりたと思ふ人、西洋へ行つた時の社交上の一要件として覺えて置きたい人、又は一遍洋行した人で更に練習して見たい人の爲めに花月の女將自ら率先して會員を募集したと云ふことは嘗て新聞で讀んだことがある。己れは唯一遍の

新聞記事の様に心得へて、いつの間にか記憶から失せてゐた。所が今親しく見聞して來た大橋君から斯う云はれて見ちや、兎角新らしいことに後れを取るまいと心掛けてゐる僕には兎てもデーツとして居られぬ。その話を聽いてからは暇さへあつたらと許り思ふてゐた所が幸ひ日曜だ、空はカーンと晴れてゐる、而かも何處へと差當り行つて見たいと思ふ所がない。して見れば今日は何うしても鶴見の花月園だ。妻に花月園へ行かうかと云ひ出すと、

「花月園て何處所か私し未だ行つたことがないのよ、行きませうよ、ねえ行きませうよ」

と云ふ。己れは更に花月園へ行くと斯うくした事があるんだと説明すると、どつちかと云へば珍らしもの見たがりの妻は、之を聽くが早いか

それツと許りに双膚脱いで鏡に向つた。見るくうちに白粉が塗られる、素盞鳴尊みたいな髪をしてゐた髪も綺麗になる。静子四歳に着物を吟味する、静子は外出とさへ聽けば電車に乗れると云ふ楽しみがあるものだから、嬉しいくと云つて飛び上がった。用意は忽ちの裡に出來た。いざ美しき夫婦にいたづら姫のお立ちで御座る。

一體己れは近頃以つて殊勝な心掛けになつたものだ、己れが妻子を連れて暢かな亭主顔を構へて出かけるとは返すくも神妙の至りである。いつも斯うだつたら家庭平和、四海波おだやかに、高砂やポーンである。妻もさを良人も年とつて來ると氣立が優しくなつてきてよと内心つくく永々添ふてゐると、成程苦あれば其の裡樂しみが斯うしてあるものだと、オホ、オホ、と嬉しいことであらう。

己れは妻子三人で外へ出ることは別に強ひて厭では無いんだけど、正直なところを云ふと静子がムツがり出すと「それぢや父ちゃんに抱っこなさい」「それぢや父ちゃんに負ぶしなさい」のそれぢや父ちゃんにが厭なんだ。静子も一歳二歳の時には何んの此れ位の重さならと軽々と平氣であつたけど、四歳になると何うして／＼その重いこと全で米俵の様で、兎もすればお父さん事グタリとなる、それでも可愛い、子の爲めだと汗みどろになつて「そら電車」「そら鳩ポツポ」それが並大抵ぢやない、家へ歸ると座敷の真中へごろりと疲れ切つて了ふ。妻は何故己れと一緒に出ることを好むと云ふと云へば、その子供の世話をしなくてもいゝからだ、おんぶでも抱つこでも一二もなく父ちゃんに委ねおのれは全て仕立卸しの縮緬見たいなシヤンとした顔して歩ける

からだ。
然し極く最近静子は今までの様な負んぶだの抱つこだのと云ふ世話の入りぬ程彼女の歩行に長足の進歩を來たしたことを我輩お父さんが發見した。もう之なら今度から左程に己れを苦しめないだらうと思ふた。だから己れは久々で夫婦仲の好い聲を出して「これ妻や、花月園へ行きましょね」と發音したんだ。實際の腹の中を云つたら一人で行くとしたら行動は自由自在だし、美人の顔は思ふ存分見られるし、どんなにいゝかも知れない。子持ちにやなるもんぢやないよ。
花月園へ入つて行つたが、中が廣いので、どこに其麼建物があるか仲々分りやしない、物知りらしい者に訊ね、又訊ねしても、一つ一つ答へが違つてゐる。漸つとのことで山上の精養軒出張所の軒續さだと聞いた

ので、一旦下りた山を又上がる。

精養軒のボーイに訊くと、舞踏は隣ですと云ふ。ありますかと訊ねると、今日は日曜だからあるでせう、イヤあるんですと云ふ。まだ始まらないんですかと更に執念く問ふと、チラと時計を見て二時半からですと云ふ。己れも時計を出した。二時半には十分しか無い。それぢやもう暫らく其處等を散歩しようと、東の小丘に立つて瞳を放つと、横濱沖らしい、軍艦らしいのだの大船らしいのが三四艘錨を下ろしてゐる。静子を抱き上げて、「そーら海が見えるでせう、そーらお船が見えるでせう」もう宜からうと其の舞踏所の入口をツカ／＼と入らうとすると切符を買つて下さいと云ふ、子供は？ と訊くと、静子の顔をチラツと覗いたボーイは少しく頬を崩して「要りません」と云ふ。ではと己れと妻の分の

二枚を買つて入つて行く。

潇洒なテーブルと椅子が一隅に夥しく並んでゐる、そこに三四人の上流顔の奥様風が坐つてゐた、まだ少し早かつたらしい。

見ると舞踏場で一組の男女が蓄音機に合せて踊つてゐた、己れは相見た刹那その女は花月の女将だナと思ふた。成程年は老つてゐるが美しい顔だ、皮膚の色だの、着物のシヤンとして着科しが全で伯爵夫人みだいだ。蓄音機が止むと同時に二人の足拍子も止まつた。「どうも有難う御座いました」と花月の女将は其の時男に挨拶した。教はつてゐたのかナと己れは思ふた。己れと妻と子の三人は臆面もなく最前方に陣取つて、杆でも動かないと構へた。そして始めて見た此の舞踏をさも／＼昔し／＼よりよく知つてまさらと許り平然と見据えてゐたが、その癖妻の耳元へ口を

遣つて「一寸活動寫真と同じだわねえ！」
 程もなく美しき令嬢、世の中に苦勞と云ふことがありませんかと云つた様
 な奥様を始め、知つたか振りらしい貴公子風が續々と入つて來た。己れ
 は男共の顔を見てビクツともしなかつた。大言に似たりと云へども己れ
 の縹緖を凌駕する様な堂々たる男子は一人もゐなかつた。顔こそ一人前
 なれ、跛でないかと思はれる様な脊の低い男や、鼻の先きが天井向いて
 尖がつてゐる様な顔や、眼が支那人の書いた様な細い、どれも之も
 よく男と名付けられて恥かしくも無く遣つて來られたと思はれる御面相
 ばかり。己れはエヘン己れを見て呉れと許りにグイと伸び上がつて、ど
 んなもんぢやいと顎で其等の者を弾いて遣つた。そして妻を顧みながら
 君は幸福だ、他所の男と較べて見ろ己れが一番ぢやろてな顔して見せた、

但し其の時妻が一心に側を見てゐて少つとも其の様子に感付かなかつた
 から本當に張合が無かつた。
 大きな聲で云ふと、出て了ひませうと云ふから黙つてゐるが女は大抵己
 れの妻よりか皆優つてゐる縹緖を持つてゐた。己れはオヤ彼女も美しい
 此女も格別だと眼をキョロ／＼させた。その裡正面のオーゲストラがそれ
 ぞれピアノ、バイオリン、セロ其他の小手調べが濟んだ後、指揮者の一
 棒高く振り翳されるや奏樂の音響はサーツと場の隅から隅へと流れた。
 すると椅子に腰かけてゐた男女は一齊に立ち上がつて男は女の伴侶を、
 女は男の伴侶を求め、あすこ此處からと踊り出た。その刹那の歡樂よ！
 彼等は恰も蠟を敷けるが如き場内を樂音に合せて圓く踊り廻はつた。男
 女の左の手は互に確つかと組まれ、右の手は互に抱き合ひ、スウ／＼

と輕やかに、華やかに、足を這らして行く。

その裡奏樂が一渡り済むと彼等は一様に手を解いてピタリと止まり、オーゲストラの方を向いてバチ／＼と拍手する、あの拍手は屹度お蔭様で心地よく踊れましたと云つて奏樂者に敬意を表する爲めであらう。それが済むと又樂音が始まる、又一切り踊る、樂音が止む、今度は互に伴侶になつて呉れた人に有難うとお禮を云ひながら椅子へ戻る。

暫らく休憩する、奏樂が新たに湧く、それと立上がる。見てゐると彼等男女は最初組んだ伴侶と全く別な男なり女なりを求めて行く、決して先刻組んだ男や女と「もう一度いゝ？」てな事をしない、斯うして至る相手を求めてゐりや自然に知るも知らぬも親しくなる、成程ダンスは社交上缺く可からざるものぢやない。

廳で外人の男女の群れがドカ／＼と入つて来た、花も恥らう金髪の乙女が又なく可愛い。其等は何等臆せず奏樂に連れて直ちに踊り出した。日本人の男と金髪と組むもの、外國人と大和娘と組むもの、様々だ。

己れは皆塵が立上がつた残りの椅子の連中を數へて見た、殆んど四人しかゐない、して見れば此の四人が見物人だ。而かも其の裡の二人は憚りながら我等夫婦だ。情けない我等夫婦だ。

そこで己れは又もや小さい聲で斯う妻に囁いた。「ねえ妻、僕等は幾程でも踊れるんだけど今日は始めて来たんだから遠慮して踊らないで居るんだよと云ふ顔付してゐよう、早い話が洋行は一回も四回もしたてな顔してゐて決してアレマアと云ふ驚きや羨望の様子を見せてはならんぞ」と、相誠めた。すると妻は心得へたもので、私も先刻から貴方に左様申

上げようと思ふてゐたんです、貴方はね何だ拙い踊だナ位にフカリ〜と煙草を燻んでゐらつしやいな」

と、きた。ウンさうぢやツと己れは慌て、煙草の朝日に火を點けて徐ろに悠然と煙を吐き出した。

又休憩になつた。己れは相變らず天井がけて煙の輪を吹いてると、聽て休んだ人達が我れも〜と煙草に火を點けるのを見てゐると孰れも石井大使の吸ふ様な葉巻の上等物ばかり、己れは見付けられぬ裡にと慌てて朝日の煙草を未だ吸つた許しで惜しくて〜仕方が無かつたけど、洋行を三四回續けたと云ふ體面上、急いで灰落の奥深く差込んで、わしや朝日と云ふ煙草は存せぬ知らぬと云ふ顔付をしてゐた。

外人の群れの一團は早くもビールだウイスキーをテーブルの上に運ばし

めて、さも旨相に咽喉をグイ〜云はせた。見渡す所外人の數と日本人の數とが均一してゐる。之は後で聽いた話だが、あのダンスを覺えるには極く呑込みのいゝ者で二ヶ月の教へを待たなくちやならぬとのことだ。此の筆法で行つたら己れ見たいな物覺えの悪い「あーん？ あーん？」と聽き返すこと許り上手な男は差し詰め半ヶ年は充分かゝるだらういくら半ヶ年かゝつても、フワリとした西洋美人の手と握り合つたら好い氣持ちだろナ。

當日の番組記念の爲め此處へ記して置く。

1. ONE STEP
2. WALTZ
3. ONE STEP
4. FOX TROT
5. ONE STEP
6. WALTZ
7. ONE STEP
8. FOX TROT

EXTRAS



癢に障つたことが一つあつた、それは日本の女で瘡せた白粉をコテ／＼に塗つた女が、どうです私見たいなダンスの旨い者はゐないでせう、私見たいな美しい女はゐないでせうと云つた傲慢な面付を見た時であつた痛快な事が一つあつた。それは其の女が踊る度に裂しい運動で汗がびつしより顔に出て、その又汗で白粉がベト／＼剥げ出して来て、全で月に叢雲みたいに斑になつた突嗟だ。

嬉しいことが一つあつた。それは何んとも云へぬ可愛い、眼をした、そして潘ろゝが如き笑窪のある肉ゆかたな廿歳頃の娘の顔である、また學校を出て間もなくと云ふ風に白粉一つ塗つてゐなかつた、どことなく大家のお嬢様らしい所があつた。己れは世の中に斯程の美と肉と愛を備へた女がゐるかと思し恍惚として眺めた、幾十組が巧みに踊つてゐても己

れの眼は其の女ばかりを瀧いでゐた。時々彼女と組合つてゐる男が、彼女に何やら小さい聲で囁いては彼女を笑ます時、己れは一種妬ましさとし

淋しさに襲はれた。此の事女房に知れたら一大事。

感心したことが一つあつた。それは花月の女將が其れは流暢なイングリッシュと、巧妙な表情で各外人を相手に慰懃を通じてゐたのを見た時であつた、女將と云へば一二もなく藝者屋か待合の女將を想ふが、何うして花月の女將は見ても聴いても日本一ぢや。新橋の花月の女將は矢つ張り此の女將である、世界一週までしてゐる女將の最上だ、何んでも最上となれば豪いものだ。

何は兎もあれ、己れも此のダンスを見てから急に洋行したくなつた。今年としの春略一萬圓近い大損をしたので、洋行の望みも一頓挫してゐるが、

斯うして眼のあたり外國氣分を見せ付けられちや、兎てもヂツとしちやゐられぬ哩。

若い女に春が來た 終

若い女に春が来た

若い女に春が来た

昭和五年七月二日印
昭和五年七月十二日發行

刷

若い女に春が来た

著者 西川他見男

著作權所有者
發行者兼印刷者
玉井清五郎

東京市神田區表神保町十番地



發行所

東京市神田區表神保町一〇番
電話神田二三三三番
振替東京三二八番

玉井清文堂

(行印部刷印堂文清)

終

